

あの頃・あの方・この言葉

～ 日本デザイン黎明期における先駆者の声 ～

vol.6 樋口 治 氏

室礼

(1966年7月 大阪デザインハウスニュース no.7 より)



樋口 治 氏 (1916-2001) = インテリアデザイナー

1916年大阪市生まれ。高島屋設計部長を退社後、京都工芸繊維大学工芸学部意匠工芸学科教授に就任。退官後、株式会社樋口環境設計研究所を設立。JIDの設立に参加し、その後の活動を通して、日本のインテリアデザインの発展とデザイナーの地位確立と向上に貢献。

写真引用：「デザインの年輪 樋口治作品集」樋口治作品集編集委員会,p.49より

室礼

interior decoration

ある美術誌の中で「しつらい」という言葉を説明しているが、それによると「しつらい」とは部屋を几帳や壁代（かべしろ）・御簾（みす）・屏風等で設備すること……すなわち部屋をしつらうという動詞が名刺化されたものであるそうである。

また、ここに出た壁代とは今日のカーテンに相当するものであって、平安朝の寝殿造りにカーテンに相当するものが既に使われていたことは興味深いが、ご承知のように、寝殿造りには今日の洋風建築でいう窓らしいものは無い。蓆戸（しとみど）といって撥ね上げ窓式のものがあるが、これも文字通り日覆いの戸と解釈するべきであろう。したがって、壁代は、窓カーテンではなく、むしろ間仕切カーテンといった方が正しいかもしれない。何れにしても柱だけで吹抜けの壁面をふさいで、防熱防寒を兼ねて、部屋のプライバシーと美観を添えるに大きく役立ったものに違いない。

御簾はこの場合、ブラインドの役目を果たして、壁代と併用されるが、これも一方から他方がよく見え、他方からは反対にその存在が伺われないという誠に便利なものであって、光線の量の加減よりも、むしろ、その貴人の優越性を満たした方が大きいような感じがする。何れにしても、当時は、この他に几帳や屏風などという極めて簡便に伸縮移動ができる間仕切スクリーン類を効果的に駆使したことが今日の比ではないと考えられる。

言葉を変えると、今日の室内でこういう類の簡易間仕切機をもっと利用してもよいのではないかということが考えられる訳であって、宣伝されている一室型式も、欧米風な重い家具、間仕切による仕切方式だけを追いかけて、軽やかで優雅な日本古来のこうした調度を再検討すべきではなからうかということにもなる。調度という言葉が出たついでに、この言葉のもつ意味を探ってみると、やはり同誌に、古代中国では、調度という文字は家具・什器の意味ではなく、「安排処置を謂う」……つまり、ほどよく並べるといふ配置に関する言葉であると出ている。今日のデザインでやかましく叫ばれているグッド・レイアウトである。

家具や什器類が、単にそれ自体美しく製作されているだけでは不十分で、それがいかに安排よく配置されているか……即ちいかによく調度されているかということが必要であって、かくして始めて美しいインテリアが造形されることになる。これは今日の我々が痛切に考えなければならない問題であって、ご承知のようにアパートを含む住居室内では配置などということが全くなっていないのであるから全く大変である。筆筒や水屋、テレビやステレオが所狭しと埋まっていて、その中に寝る場所もない住まいは、調度によって悪い調度が構成されたと謂い得る。

こう考えてくると標題の室礼という文字もまた意味深くなってくる。部屋をしつらうと書いてしまうと何の感慨も湧かないが、室に礼を持たず意味の室礼と書くと、まことに格調あり優雅な室のたたずまいを感じさせる。我々の祖先は、こういう点になるとまことにデリケートな感情を持ち、それをまた適切な言葉で表現するのがうまかったようだ。著名な建造物の遺跡を訪ねると、室礼という言葉そのものが切々とせまるような室内に出会う。著名でなくても、京都や高山などに在る民家などには、美しくしつらわれた部屋によく出会うこともご承知の通りである。

最近、一流メーカーがその取引先の間屋や小売店を招集して、自社製品のPRを兼ねて商品に関するデザイン知識や販売プロモーションの講習会を行うことが流行っている。先日、私もある一流装飾織物メーカーの年1回の講習会の講師を依頼された。私の講演はスポンサーの指定によって、「室内織物と色彩の関係について」という事に決まった。ところが受講者はすべてその方の素人であるという事で、どういう方法で話を進めようかという点ではたと困ってしまった。

受講者が、その筋の人…即ち工芸学校やデザインコースの教育を一寸でも受けた人々であると、こういう講習は至って容易いのであるが、この場合は全然そういう人達がいらないということである。装飾販売業をしばらくやってきた人ならば、まだ見様見真似でいささか馴れていると思うが、中には金物屋や畳屋さんがいるという。カーペットやカーテンを金物屋や畳屋が扱うとは世の中も変ってきたものだと驚いたが、よく考えてみると、田舎ではカーテンが荒物屋の一隅に置かれ、畳屋が住居改革に従ってカーペットを売ることも却って実際的であるかもしれないと悟った。しかし、こういう人達に室内の色彩を話しても果して判ってくれるだろうかという事がいよいよ心配になった。

スポンサーからも難しい理論は止めてほしいという事で、思い切って講演の中で色彩調和の実習をさせてみることにした。事前に心齋橋の河内屋を探してみると、うまく教材用の色紙が見つかった。それも案外廉価で、色数も原色混色とりまぜてなかなか多い。そこでそれを使って三色調和…聴講者にその中から自由に好きな色を採り出して調和すると思うものを三色、白紙に貼らす方法であるが…をやらせることにした。

当日は300名近い聴講生なので、その中から15名程選んで実習をさせてみた。殆どが20代の若者で、15名の中に女性を2人程入れてみた。講演の関係で20分程の短時間であったが実習の結果を見て驚いた。なかなか上手いのである。私の想像していたレベルを遥かに上回った大したものである。もちろん、中には若干頂けないものもあったが、それも化粧品の色や、服飾の特定な色調に影響された片寄ったものであって、全然箸にも棒にもかからぬというものは一つも無かった。

たかが荒物屋、畳屋などと舐めてかかった私の不遜な気持ちを心から反省すると共に、私はこれではいかんと思ったのである。それは私を含めて業者など専門家といわれる層があまりにも素人を甘く視ていないかということであった。例えば、一般に売り出されているカーペットの色が、いかに通り一遍の色相と彩度を持つものばかりであるか…そうしてこういう物しか素人に受けないのだと思い込んでいる業者の不勉強さがまざまざと痛感されたのである。黙々としていながら、その底にシャープな色彩感覚を持っている素人の消費者と対比して…。